学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
２０１９年７月６日
文責：ＪＵＮ

道徳の授業を考える

１　道徳の授業の難しさ

道徳が教科になった。そのためなのだろうか、学校訪問において道徳の授業を参観することが増えたような気がする。そして、感じるのは、教師たちがその難しさに直面しているということである。

道徳の授業のどこが難しいのか。それは、教師でなくてもだれでもわかることである。道徳の学びは生き方の学びであって、知識を獲得する、理解する、技能を身につけるということではないから難しいのだ。生き方、倫理観は、時代の状況や周囲のありように、本人の自覚のあるなしにかかわらず左右されながら、それでも常にどう生きるべきかと模索する数々の経験によって時間をかけて形成されていくものである。だから、人の生き方が簡単にすっと変わるということはない。ましてや、週に１時間程度の、何人もの子どもを対象にした授業でどれほどのことができるだろうか。

教科書ができて、そこに子どもたちに読ませる資料としていくつもの読みものが掲載されている。そして、その読みものによって、どういうことを子どもに考えさせればよいかという「問い」まで示されているという。本気で子どもの生き方の育ちを願う教師なら、教科書の資料を深い吟味もしないで、掲載されている順に授業することに違和感が生まれないはずがない。ましてや、教科書に示されている問いをそのまま受け入れて授業するなどということに強い違和感を抱かないはずがない。どう考えても、与えられた資料で示されたように発問するだけで、本気で生き方の学びができるとは思えないからである。人が己の生き方についてだれかから学ぶということは、自分に向き合うそのだれかの人格と出会うということなのだ。

もちろん、道徳教育の難しさは周知のことであり、道徳の学びは道徳の時間だけで行うものではなく、全教育活動においてなすべきことだと言われてきた。算数や国語などの教科の授業においても、特別活動の時間においても、清掃や給食の時間においても、休憩時間においても、つまり学校生活全般に行うものとされている。それらのすべての時間において子どもたちはさまざまに心を動かしているのだから当然のことである。

当然のことだが、子どもの生き方の学びは、子どもたちを取り巻く環境である家庭と地域と学校とのつながりのなかで、長い時間をかけて実現していくものであり、学校は、その一翼を担っているのだが、子どもが学校で生活する時間はかなりの長さになることを考えれば、学校が担う役割の比重は低くはない。当然、子どもの生き方の学びに務めなければならない。教師たちもそう自覚しており、子どもがよりよく育っていくのを願っている。

そこで、考えなければいけないのは、教科になった道徳の授業をどのように位置づけ、どのようなことに留意していけばよいかである。それは、決して、教科書どおりに、そこに示された問いを投げかけるだけのもので済むはずがないのだが、それよりも私が危惧するのは、教科化ということで流されてくる情報の多くが方法論に陥っていることである。それは極めて危険なことである。こういうやり方をすれば、うまくいくということは絶対にないからである。どんなことでもそうだが、人間的なことは、どういうやり方をすればよいかという方法に当てはめただけで行えるものではない。現実は多様であり、複雑であり、予想できない危険性も可能性も秘めている。だから、さまざまな出来事や人に出会い、ゆさぶられ、思考し、葛藤しながら人の生き方は形成されていくのだ。教師は、小手先の方法論に惑わされてはならない。

２　道徳の授業を行うことをどう考えればよいか

教育課程に位置づいているのであるから、道徳の時間は必ず毎週めぐってくる。そして、子どもたちがその授業に臨む。そう考えると、どんなに難しいことであっても、教師は子どもに対する責任をまっとうしなければならない。子どもの生き方の学びに少しでも寄与する授業をしなければならない。それが教師としての子どもへの責任である。教師としての矜持である。

一つの読みもの教材を読んだから道徳的価値の獲得ができ、子どもの考え方がよりよくなったり変わったりするということはほとんどないと述べた。よほどの状況で、よほどの優れた教材に、よほどのタイミングで、よほどの人物によるよほどの出会い方をしない限り、それは無理だからである。

そのように考えると、道徳の授業の否定のように聞こえるかもしれないが、私はそうとは思っていない。どういうことかと言うと、すぐに変化や深まりに直結しないけれど、子どもたちに考える場を提供することは悪いことではないと思うからである。

全国でいくつも表面化した子どもの「いじめ」による事件がきっかけになって、さまざまなことが議論された。道徳の教科化もその一端から出てきたことだと報道されている。子どもの心を育み耕す道徳教育を充実すればと考えることは理解できないことではない。しかし、道徳の授業を教科に格上げして行えば「いじめ」はなくなるとストレートにつなげることには無理がある。そんな単純なものではないことはだれもがわかっていることである。もちろん、生き方の学びである道徳教育はいじめ撲滅だけのために行うものではないし、もしそういう短絡的意識で行えばそのいじめに対してさえも力を持たないだろう。

即効性を求めないで、将来にわたっての意味を持つ学び、それは簡単なことではない。難しいことだ。道徳の授業はまさにそういうものだが、では、道徳の授業をどう考えればよいのだろうか。子どもにとって意味のある学びにするのはどうしたらよいのだろうろうか。

私は、それは大きく分けて次の二とおりではないかと考えている。

一つは、「こんなとき自分ならどうするか」、そう考えなければならない事例にいくつもいくつも出会うことである。そして、もう一つは、本当に心の動く事例に出会うことである。

人はいろいろなことに遭遇しながら生きている。今も、これからも。そして、今も、これから

も、そのとき、そのとき、自分は、自分たちはどうするべきかという判断をしなければならない。「生きる」ということは、そういう判断の繰り返しであり、連続・蓄積であり、つながりである。だから、その時々の判断がどうだったか、それがその後の人生を左右することになる。

子どもたちの人生は未来に開かれている。だから、今後、こうした判断が必要となる場に必ず出会うことになる。小さな判断もあるだろうし、かなり重大なこともあるだろう。それほど遠くないうちに出会うかもしれないし、出会いはずっと先のことかもしれない。どちらにしても、そういう局面に立ったとき、それまでにさまざまなケースを経験していれば、そのときの判断の助けになるかもしれない。それが道徳の時間の学びの第一の意味である。

二つ目の心の動く事例とはどういうものだろうか。そう考えて思い出すのは、すべての指と掌の半分を失ってしまった一人の溶接工の人が、「箸を使いたい」という思いから、わずかに残る親指の付け根が動くことを頼りに、豆腐でも掴める器具を発明するに至る 12 分半のドキュメンタリー映像を視聴した授業だった。

この授業のことが今も鮮明に心に残っているのは、溶接工の方のこともだけれど、映像を見終わった直後の子どもたちと教師の姿に心打たれたからだ。ＤＶＤが終わり、テレビ画面から映像が消えた。にもかかわらず子どもたちは全く話そうとも動こうともしなかった。涙ぐまんばかりに黙っていた。そう、心打たれていたのだ。そして、教師も、そんな子どもたちをただじっと見つめ黙っていた。沈黙はどのくらい続いただろうか。やがて、教師は、ごく小さな声で「今の心の中の思い、グループでそうっと聴き合ってみようね」と告げた。子どもたちは言葉を発しないまま静かにけれども素早く机をグループにした。そして、席につくやいなやグループの仲間にだけ聴こえる小声で、「すごいなあ！」「すごい人やなあ！」とつぶやきのように語り始めたのだった。

道徳の授業は、人としての生き方を心で感じる営みである。それは、知識を得ることではない。わかるという言い方はそぐわない。それは、心で感じるということなのだ。この事例のようにすごいと感動したり、全く逆に激しい怒りを覚えたり、深い反省の念を抱いたり、とにかく理屈ではなく心がゆさぶられる、そのとき、子どもたちの心のなかに、何がしかの心情の深まりが生まれるにちがいない。人は本当に心打たれたとき、しばらくの時間、語る言葉を失う。道徳の授業でもそうでありたい。心を打つこととの出会い、それが二つ目の意味である。

道徳の授業をする教師は、道徳的な学びをするとはそういうことなのだと認識しなければならない。すぐに結果をだそうとはしないで、ずっと先のことまで見据えた小さな経験を、けれどもその小さな経験の積み重なりがきっと子どもにとって大きな心の育ちにつながる、そう考えて取り組まなければならないし、子どもとともに心の震えが体験できる授業を目指さなければならない。

３　教師として心しておきたいこと、陥ってはならないこと

道徳の授業をする意味を以上のように考えると、教師として心しておきたいことはどういうことなのか、そして、陥ってはならないことはどういうことなのか見えてくる。

まず、教材だが、子どもたちの判断力をつけていくに適した場面、状況が出ているもの、また

は、生きることの感動が表れているものを選ぶ必要がある。それには、子どもたちに、こういう場面に出会ってほしい、出会っておくと絶対によい、こんなに感動的な事例にぜひ出会わせたい、そう思える教材を探し出す努力が不可欠である。教科書教材で授業をするとしても、決して、教科書の順番に機械的に形式的に行う道徳の授業であってはならない。教師が教材を選ぶということは、子どもの将来への願いを持つということなのだから、リアリティのある内容を有し、子どもの心をゆさぶる優れた文章や映像による教材を準備しなければならない。

道徳の授業のあり方として「議論する道徳」という言い方がされている。教師が教えたい価値観をそのまま子どもに伝達するあるいは教えるということではなく、子どもに判断を求め、子ども一人ひとりが自らどう考えるか、どう行動するかを考えさせる。その際、考え方の違いが出るであろうから、それを議論させるということなのであろう。

互いの考えを聴き合うということにはおおむね異論はない。しかし、無理に異なる考えを引きだし議論させるということはよいことではない。議論という言い方の硬さ、形式性も気になる。「議論する道徳」という用語が先行し、まるで「議論するための議論」をやっている授業がはびこってしまったらそれはもはや子どもにとっての生き方の学びではない。よい授業をするためのパフォーマンスになってしまう。聴き合いは、自然発生的に考え方の違いが生まれたそのとき、子どもの内に自然な欲求として起こるものである。「議論する道徳」の「議論」とは喧々諤々と華々しく行うものだと考えないで、「聴き合い」なのだと考えて、しっとりと互いの感じ方を擦り合わせるようにするとよい。

授業においては、当然、子どもたちに何らかの判断を求めることになる。そのとき、二者択一的に子どもに迫る授業がある。決して賛成できる手法ではないが、百歩譲ってそういう状態が生まれたとして言っておきたいことがある。それは、少なくとも、どれだけ考えてもどちらかに決められないという状態を尊重しなければならないということである。実生活において遭遇する出来事には、そういうことが多々あるからである。本気になって考えれば考えるほど、判断がつかなくなることがあるからである。教師は、適当にどちらかに決めさせるようにしてはならない。決められない状態に陥っている子どものほうが本当に考えていることが多いからである。大事なのはどちらかに決めることではなく、どう判断するかを考えることなのだから。

聴き合ううちに、考えが変わるということはよいことである。本気になって考えを交わすうちに、こうだと思っていたことがそうではなかったと気づき、考え方を改めるのは歓迎すべきことである。もちろん、やはりこうだと最初の考えを貫くのもよいことである。間違っても、二つの考えに分かれて考えを闘わせるディベートのようなやり方をさせてはならない。いや、私は、ディベートにおいても主張が変わってよいのだと思っている。他者と考えを出し合うということは、相手の考えを潰し、自分の考えを押し通すための闘いなのではなく、どこまでも「よりよいもの」を求め考え合う行為だと思うからである。そういう意味では、よく使われる「討議」という言葉もあまり好きではない。相手を「討つ」ために考え合うわけではないのだから。

子どもにきれい事を言わさないようにいつも留意したいと思う。道徳の授業になると、教師は、

どうしても、目標に掲げた価値観を指導しなければならないと思ってしまう。教師には一定の思惑がある。思惑という言い方がそぐわないのであれば「めあて」とでも言っておこうか。授業をする教師は、「めあて」に向かって、「めあて」に存在する価値観に近づけるように授業を展開することになりやすい。そうすると、子どもは、そういう教師の雰囲気を感じ取り、どういうことを言えばよいのか、どう考えれば先生の意図に応えられるのかと教師の顔色をうかがうようになる。そうなったときに語る子どもたちの言葉は、きれい事になりやすい。

道徳の授業が、そういうきれい事の言葉のオンパレードになったら、それは虚飾に満ちあふれたものになってしまう。それは私のもっともいやな状態である。子どもの今に対しても、将来に対しても、決してよいことではない。もし、そういうきれい事を「よい考えだ」として教師が受け入れてしまったら、どんなときでも、うまい言葉を駆使して切り抜ける体質を助長してしまうことになる。

だから、もし、明らかにきれい事だと思う考えが子どもから出てきたら、即座に否定することはよくはないけれど、教師は少なくともそういう状態に違和感を抱かなければいけないし、そのようなきれい事を言わせてしまった己の授業のまずさを悟らなければならない。

そして、授業を終えてからになってしまうが、そのようにしてしまった授業のあり方を反省的に振り返らなければならない。そうすれば、子どもたちの生き方につながる学びのために、何をどう授業すればよいのかと真剣に考えることになるだろう。そのとき、前述した溶接工の方の事例のように、きれい事を言うどころか、言葉を出せなくなるほどの心の震えが生まれる、そういう学びをこそ生み出したいと思うようになるだろう。それには、私たち教師が常に振り返りながらよりよいものを生みだそうとする反省的実践家になることだし、そういう機微が感じられる感受性を求め続けることが大切になるだろう。

ただし、あまりにもナイーブにならないほうがよいし、硬く考えすぎないほうがよい。道徳的に完璧な人間などいないのだから、道徳の学びはこうあらねばと考え過ぎるとかえって人間的ではなくなる。ただ、教師に学びに対する誠実さと子どもに対するこまやかさ、そして何よりも生きることに対する謙虚さがなければ、子どもの心は豊かにはならない。道徳の授業において大切なのは、授業のやり方なのではなくて、教師のありようなのだ。そのことははっきりしている。

そういう意味で、私は、人としての生き方のようなことを「教える」ということは「畏れ多いこと」だという思いを持っている。子どもは人生経験が少ないのだから、判断できないことが多々あることには間違いない。けれども、内容によっては、大人である私が感心するようなことをやってのけることもある。だから、私は、子どもは全面的に未熟だとは思っていない。むしろ、同じ人間として尊重しなければならないし、子どもから学べる教師でありたいと思っている。子どもであっても、子どもだからと下に見るのではなく同じ人間として向き合うのは当然のことである。

それ以上に思うのは、私が人の生き方を指導するということに対する「畏れ」を感じているということである。私は、何歳になっても自分の未熟さと向き合っていきたいと思っている。もちろん、この歳になると、未熟さも自分なのだと納得し、急がず慌てず、残された人生でぼちぼち磨いていこうと思うようにはなっているけれど、だからと言って、自分は人の生き方の指導ができる器だという思い上がりは厳に慎みたいと思っている。それは子どもに対しても、外部協力者

としてかかわる学校や教師たちに対してもそう思っている。
　教師は、大なり小なり、そういう「畏れ」を持っていなければならないのではないだろうか。子どもが信頼するのは、その「畏れ」を有していながら、自分たちに対して誠実に、しかし毅然として対してくれる教師だと思うからである。私自身の経験から言っても、子どものときも、教師になってからも、今も、信頼できる人はそういう人だからである。人と人との関係には、子どもと教師の関係であっても、「畏れ」という感覚はなくてはならないものだと思っている。

　とは言っても、教師は指導者として道徳の授業をしなければならない。へりくだってばかりでは務まらない。学びを中途半端なものにしてしまうからである。
　だから、きりっとして、子どもの前に立たなければならない。そのとき、教師は、子どもたちに考えさせる題材として選んだ教材に対して、自分も学ぶのだ、一人の人間として向き合うのだという立場に立って、子どもをリードしながら、一人の学び手になるべきだ。教師とて、人生という道を歩む旅の途中なのだから、いつまでも学ぶべき存在なのだ。ましてや、道徳の時間は人としてのありようを学ぶ場なのだから。自らも真剣に学ぼうとしていると、その雰囲気は必ず子どもに伝わる。そうしたら、子どもも本気で考え始める。
　尊敬するある教育者が「教えることは学ぶこと」という名言を遺している。教師が「教える」という意識だけになったとき、それは力を持たない。自らも「学ぶ」という意識のある教師だからこそ、「教える」ということにも力が宿るのだということをおっしゃったのだと思う。心しなければいけない言葉だ。

　冒頭、道徳の授業づくりが、方法論に陥ってはならないと述べた。ここまで、綴った文章を読んでいただいて、私の言いたいことを理解していただけたと思う。
　道徳の学びは、人としてどう生きるかの学びである。それが少しでも力を持つのは、常に人としてどう生きるかと自らに問い、子どもとともに自らの未熟さに立ち向かう教師による授業においてではないだろうか。
　傲慢な態度で子どもにだけ強いる道徳の授業にしてはならない。